I 死と葬儀の歴史と民俗—高野山の安居会講演より—

1 民俗学の考え方 2

民俗学とは　おさい銭はなぜ投げるのか
お金には二つの意味　贈与の二つの意味
貨幣は死をもたらす　贈与こそが社会関係の基礎
浄財と喜捨　同様なものを集めてみる
小さな疑問も大きな知の鉱脈

2 死の歴史 14

方言周圏論　盆とホカイ　死は概念である
ニホンザルと死　概念は共有される　旧人と新人
大量虐殺による種の保存　死の発見は宗教の誕生
ホモ・サピエンスの特徴は学習　王・宗教・貨幣
多様な葬法　科学の誕生

3 葬送三転考 37

「畏怖と祭祀」　殯の風習と遊部　火葬の歴史

「忌避と抽出」へ　継続した陵墓祭祀
「供養と記念」へ　近世の葬送習俗

4 伝統社会の死と葬送 54

伝統的な葬法　白装束に三角布の意味
喪服の変化—白から黒へ—　死者と米　三種類の米
死者が呼ぶ　経験知から迷信へ　枕飯と引っ張り餅
葬儀と魔除け

5 現代社会の死と葬送 76

有名人の葬儀　記念の個別差
実際の死者と墓石を建てられた死者　墓石は異常死者のため
儀礼の商品化　都市上流階級の儀礼文化
結婚式にも次々と変化が　民俗の三つの伝承波とその循環
看取りと死に顔　この世に執着を残さず　葬儀の大変化
三つの立場　三つの処理　切断と接続
霊魂観と死穢観の変化

6 墓と供養の時代差と地域差 105
時間をかけて段階的に変換していた生と死
埋葬墓地のさまざまな装置　盆棚と死者供養
墓地と死穢の地域差　宮座祭祀と両墓制　墓石の変遷
家・墓・寺の三位一体のシステムの崩壊と葬儀社への依存

7 宗教と科学 127
前近代の知　曖昧領域にも意味がある
一元論の二分法へ　死が学問の対象となったのは二〇世紀から
いま医療の現場で　病院内に葬儀場―韓国の最新事情―

8 民俗学の霊魂論 138
霊魂の語り　幽霊話とその機能　霊魂論から人間存在論へ
神社と日本文化　厳島神社の再建は北条泰時
伊勢神宮と世界遺産　調和の文化　死をめぐる教育
記憶の時代へ　「千の風」ブーム―葬送三転の歴史から新たな四転へ向かう兆し―
死への準備

Ⅱ 慰霊と軍神—言語と文化の翻訳— 169

1 慰霊と追悼—Memorial を慰霊と翻訳してはならない— 170

柳田國男の用語には、慰霊も追悼もない
祭祀と供養の区別
先祖と祭祀
死者と霊魂　「ほかい」と「まつり」
国民国家と戦争、そして戦死者
言語と文化の翻訳
平田篤胤の御霊信仰　死者儀礼のダブル・スタンダード
招魂弔祭と忠魂英霊
慰霊と追悼のちがい
Memorial とは抱きしめるように共感し決して忘れないこと
Fallen Soldiers は英霊ではない
英霊とは靖国神社に祀られた戦没者の霊

2 軍神の誕生 194

英霊と軍神

日露戦争と軍神
人間を神に祀る習俗
軍神広瀬中佐
戦死から軍神へ　銅像建設の意見　二銭銅貨大の肉片　文章の潤色と情報の肥大化
戦死の状況
海軍参謀小笠原長生
戦史編纂　無理な作戦の失敗と軍神の創造　新聞報道と小笠原参謀　軍神の誕生
戦後の冷淡と銅像建設　尋常小学校読本と小学唱歌による宣伝　お気の毒な銅像
平時の冷淡・戦時の高揚
満州事変と広瀬神社　神社という膨張装置
3 真珠湾の九軍神　228
一二月八日の真珠湾攻撃　大詔奉戴日と九軍神の報道
帰還か決死か、志願か命令か　特殊潜航艇の呼称　軍神の母
上田定兵曹長　両親宛の書簡　母親の心情　慰霊碑と遺品館
註・参考文献
あとがき